

平成28年度 発達障害の可能性のある児童生徒等に対する早期・継続支援事業
(発達障害早期支援研究事業)
成果報告書 (概要版)

実施機関名 (国立大学法人長崎大学)

1. テーマ

国立大学附属学校における特別支援教育システムの展開に関する実践研究
ー附属学校・支援ラボ・発達障害支援アドバイザーの協働による支援ー

2. 問題意識・提案背景

立ち後れが指摘される国立大学教育学部附属学校の取組の端緒として長崎大学の平成26～27年度の取組は、試験的・網羅的な取組であった。中でも、明確に効果が確認できたのは、①発達障害支援アドバイザーの活用による一斉授業での指導方法の改善・工夫の推進、②“外付けの通級指導教室”である大学支援ラボにおける個別指導・支援であった。これらは今後も継続的で発展的な取組が必須である。さらに現在の改善すべき課題は以下の4つである。

第1に児童生徒の、よりシステムティックな明確化の手続きを構築する。

第2に個別指導・支援のプログラムの更なる研究である。支援ラボでは、アセスメント、保護者面接、継続プログラム(学習支援、行動問題解決支援、社会性支援)を提供し一定の効果を上げたが、二次的症状への情動調整プログラム研究が課題である。

第3に個別指導プログラムにおける教材研究として ICT 教材の有効活用を導入する。

第4に、PDCA サイクルに基づいた、実施及び評価と修正の取組が必要である。

3. 目的・目標

事業の目的及び目標は、昨年度までに実施し一定の成果を上げた、教育介入に対する応答 (RTI : Response to Intervention) モデルを参考とした、スクールワイドまたはクラスワイドな多層的な支援システム構築による、発達障害の可能性のある児童生徒の早期支援の実現をさらに進め、一層児童生徒の具体的な支援の方法を検討することである。

第一に、発達障害の可能性のある児童生徒の明確化の方法の確立である。早期気づきと実態把握のための方法を検討、確立する。

第二に、学習・行動面で困難を示す児童生徒に対する指導方法の具体的な精査による改善・工夫のための実践を行う。以下の3点を柱とし、支援の実績を蓄積し、様々

な特性を示す児童生徒に対応が可能となることをめざす。

- ・発達障害支援アドバイザーの活用により一斉指導における指導方法の改善・工夫について検討する。
- ・放課後個別指導の場である、“外付けの通級指導教室”をコンセプトとした大学支援ラボでの個別支援を実施する。
- ・指定校（附属学校）と大学支援ラボを発達障害支援アドバイザーがつなぎ、協働的支援を実現する。

4. 主な成果

○発達障害支援アドバイザー3名を雇用し、観察、直接指導、教師への助言を行った結果、発達障害の可能性のある児童生徒の明確化の促進と、学校生活における困り感の継続した事例の減少につながった。

○一斉指導における指導方法の工夫・改善において継続した指導助言を行った。

○“外付けの通級指導教室”である大学支援ラボにおいて20名を対象に教育的ニーズに関するアセスメントと個別支援を実施し、その成果を指定校にフィードバックすることによって、学校での指導方法に活かすことができた。また、継続プログラム（学習支援、行動問題解決支援、社会性支援及び情動調整）の検討を行い、特に情動調整のための多様な実践の蓄積がなされた。

○年度当初に運営協議会を設置し、長崎県及び長崎市教育委員会、県教育センターへの委員委嘱を行い運営協議会を開催した。さらに研究事業について各委員へ随時相談・助言を受けることができた。

5. 指定校における取組概要

①学習面や行動面で何らかの困難を示す児童生徒の明確化

発達障害の可能性のある児童生徒の明確化について、6月に担任の気づきをもとにリストアップを行い、小学校約50名、中学校3名を発達障害支援アドバイザー3名の観察対象とした。そのうち20名については、個別の教育支援計画（個人理解表、アンケート、実態把握チェックリスト（長崎市教委）、プロフィール表、個別の指導計画で構成）の作成支援を行い、特別支援に関係する校内委員会やケース会議において活用した。またスクリーニングツールの基礎研究を行った。

さらに個別支援対象となった児童生徒20名（小18・中2）は、発達障害支援アドバイザー1名及び大学教員等が、外付けの通級指導教室である大学支援ラボにおいて、放課後、原則週1回の個別支援を計384回実施した。個別支援の内容は、アセスメント、支援プログラム（学習支援、行動問題解決支援、社会性支援、情動調整支援）、保護者面接であった。

②学習面（「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」）で困難を示す児童生徒に対する指導方法の改善・工夫

○発達障害支援アドバイザー3名を雇用し附属小学校・中学校に配置し、観察330件（小268・中62）、直接指導73件（小66・中7）、教師との情報交換159件（小

126・中 33)・相談提案 77 件 (小 59・中 18) を行った結果、発達障害の可能性のある児童生徒の明確化と個別支援へのつなぎの促進、学校生活における困り感の継続した事例の減少、教員の相談促進につながった (③の内容を含む)。

- 一斉授業における指導方法の改善・工夫については、発達障害支援アドバイザーにより毎週 1 回、教室巡回及び授業観察を行い、教室環境や授業を観察し合理的配慮の観点である【物理的環境への配慮】【意思疎通への配慮】【ルール・慣行の柔軟な変更】に加え、【個を大切にす対応】【集団の中で育てる】【授業の工夫】の 6 つの視点より、現在の授業の“特別支援的視点での整理・意味づけ”を行った。またその結果を学校・教師にフィードバックすることにより、今後の指導方法の改善・工夫について協議する場を設けた。
- 支援ラボでの個別支援対象児童生徒については、アセスメントを実施し、【学習支援】プログラムを提供した。特に、ICT 機器 (タブレット端末) のアプリケーションを用いた指導の研究に重点を置き 78 のアプリの基礎研究と 15 例での導入を行った。また、書字・読字に関する教材の研究により、児童生徒個々の実態に合わせた教材・支援の実施を行うことができた。支援ラボでの支援成果は、発達障害支援アドバイザーを通して学級担任に情報提供し、教室での指導に改善・工夫点として取り入れる方法について検討する機会を持った。

③行動面(「不注意」「多動性－衝動性)」で困難を示す児童生徒に対する指導方法の改善・工夫

- 発達障害支援アドバイザーによる取組は②の通り。
- 特に行動問題を示し、その解決が必要となる児童生徒については、【社会性支援】プログラムとして、ソーシャルスキルトレーニング (以下 SST) を中心とした指導を取り入れ、発達障害支援アドバイザーを通して学級担任にフィードバックする機会を設け、指導方法の改善・工夫について協議する場を設けた。
- 特に情緒面に問題を示し、その解決が必要となる児童生徒について
二次的障害と思われる、自信のなさや不安、他者への攻撃や行動を繰り返す児童生徒が複数みられたことから【情動調整】プログラムの開発と実施を行った。構造的遊びを取り入れた変形プレイセラピー、SST、ストレスコーピング、自己理解ワークなどを実施、その成果をもとに指導方法の工夫について検討した。特に、畑(栽培)活動、小イベントの企画運営など、児童生徒の実態に合わせた多様なプログラムを開発することができた。

6. 今後の課題と対応

第 1 に、児童生徒の明確化については、発達障害支援アドバイザーを中心に早期発見と実態把握につとめることができたが、さらに学校としてのシステム化されたスクリーニング・システムが必要である。今後は、今年度の基礎研究をもとに、附属小学校・中学校 9 年間を通した支援の実現に向けて、システムとしての構造的なスクリーニングの導入の実現を目指し、管理職を含めたコアチームを結成し、一斉スクリーニングテスト導入の可能性や時期、テスト構成について検討、実践する。

第 2 に、一斉授業における指導方法の改善・工夫について、発達障害支援アドバ

イザーによる指導助言、ユニバーサルデザインを基盤とした研修の実施、個別支援での成果のフィードバックを行ったが、教科ごとの教材研究や指導方法の開発までには至らなかった。特定の教科の指導に関しては、対象児童生徒への指導に関して教員の困り感などの意見や要望も見られた。今後は、教科ごとの指導法の研究等の深化のため、大学の、特別支援教育専門教員、教科教育を専門とする教員、附属校における該当教科教員で構成した研究チームを立ち上げ、指導方法の検討、実践を行う。

事業終了後の成果の周知方法としては、報告書（全 138 頁）を発行し、長崎県内の小中学校全校及び教育行政・関係機関、全国の特別支援教員養成課程を持つ大学に送付した。さらに、大学 HP(以下 URL)にて成果報告書を公開した。さらに、県教育センターとの共同企画により、本取組の成果を元にした公立校教員の研修を実施する予定である（7月）。

<http://www.edu.nagasaki-u.ac.jp/ja/char/index.html>

7. 指定校について

(小学校の場合)

指定校名：												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	98	4	97	4	96	4	94	4	94	4	88	4
特別支援学級	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
通級による指導 (対象者数)	0	0	0	0	2	0	1	0	1	0	0	0
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育 支援員	スクールカウンセラー		その他	計
教職員数	1	1	26	1	6	2	3	0	0		8	48

(中学校の場合)

指定校名：												
	第1学年				第2学年				第3学年			
	生徒数		学級数		生徒数		学級数		生徒数	学級数		
通常の学級	142		4		143		4		141		4	
特別支援学級												
通級による指導 (対象者数)												
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育 支援員	スクールカウンセラー		その他	計
教職員数	1	1	22	1	4	1	4					

8. 問い合わせ先

- | | |
|-------------|---------------------------|
| (1) 担当部署 | 長崎大学教育学部附小学校事務室 |
| (2) 所在地 | 長崎市文教町4番23号 |
| (3) 電話番号 | 095-819-2272 |
| (4) FAX 番号 | 095-819-2273 |
| (5) メールアドレス | hisayuki@nagasaki-u.ac.jp |